カンピオーネ！ 東方不敗を冠する王

テツオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンピオーネ！ 東方不敗を冠する王

【Nコード】

N5527S

【作者名】

テツオ

【あらすじ】

神を殺しその権能を篡奪した魔王、カンピオーネには、最強の江戸っ子がいた。

東方不敗の異名をとる彼は、自分にとって面白いことを見つけるために世界を旅する。

チートなオリキャラを主人公に、『カンピオーネ！』の世界を描きます。

プロローグ(前書き)

俺・・・・・・・・ホント何してんだろ。

病気で寝込んでたらしいの間にか新しい小説を書いた。何を言っているか(r y

プロローグ

【十九世紀イタリアの魔術師、アルベルト・リガノの著書『魔王』より抜粋】

……この恐るべき偉業を成し遂げた彼らに、私は『カンピオーネ』の称号を与えたい。

読者諸賢のなかには、この呼称を大仰なものだと眉をひそめる方がいるかもしれない。あ

るいは、私の記録を誇張したものとみなす方もいるかもしれない。

だが、重ねて強調させていただく。

カンピオーネは覇者である。

天上の神々を殺戮し、神を神たらしめる至高の力を奪い取るが故に。

カンピオーネは王者である。

神より篡奪した権能を振りかざし、地上の何人からも支配され得ないが故に。

カンピオーネは魔王である。

地上に生きる全ての人類が、彼らに抗うほどの力を所持できないが故に！

【二〇世紀初頭、枢機卿アントニオ・テベスが教皇庁に宛てた書簡より抜粋】

神に背を向け、悪魔の知識を玩ぶ魔導師どもに『王』と崇められる存在がございます。

おそらく、皆様も彼奴らの称号を一度は耳にしたことがありでしょう。

カンピオーネ。エピメテウスの落とし子。魔王。

極めて遺憾ながら、この者たちに抗う術を我ら人類は持ちません。彼奴らと互角に戦い得るのは、同等のカンピオーネか父なる神に仕える天使たち、または忌まわしき異教の神々だけなのです……。

【グリニッジの賢人議会により作成された、東風丘桜樹とうふうか さくらじゅについての公式文書より抜粋】

まず始めに、この件に関わる全ての者に何よりも先立って留意していただきたいことがある。東方不敗の二つ名と共に畏怖される東風丘桜樹が何よりも嫌うのは、身内が傷つくことと、親しくない者に己を詮索されることである、ということだ。

現在世界に存在する八人のカンピオーネの中でも、最も古き時代よりその至高の座を射止め続ける彼は、基本的に傍観者として存在することを常とする、魔王らしからぬ魔王である。しかし、一度その琴線ひもとびに触れば、その怒りは際限なく一族郎党友人隣人に至るまでに降り注ぐ。これはすでに歴史が証明している。故に彼に関する情報はこれに記されたものが全てであり、これ以上を探れば待つのは破滅のみということを肝に命じていただきたい。この文書に記された情報は、グリニッジを訪れた彼に、彼と懇意にしている本議会特別顧問アリス・ルイズ・オブ・ナーヴァルが交渉し、彼の直接の監修のもと作成されたものであることをここに記す。

曖昧なところも多々あるが、事情を察していただければ幸いである。彼は現在十柱以上の神を殺している。正確な数は不明だが、全ての権能を自在に行使できるのは明白であろう。

名前よりわかるだろうが、彼は東洋の島国日本の生まれでありその

齡はすでに三世紀に至る。

彼は常に世界中を放浪しているため、彼の助力を仰ぐのは至難である。しかし、神出鬼没である彼は思わぬ場所に表れるため、いついかなるときに出会おうと礼儀を欠かぬようにしていただきたい。

数多の武勇を誇る他のカンピオーネですら歯牙にもかけない、最強のカンピオーネである彼の機嫌を損ねることに意味など、億に一つもないのだから……。

プロローグ（後書き）

ということでもさかの『生徒会』『とある』放置で新作です。

一週間以内に垣根の方はどうにかします。短いでしょうが。

生徒会は……今かなりスランプなので、このまましばらく上げられないかも。募集してるオリキャラがあと三人くらい集まったら、考えてあげてもいいんだからねっ！あ、ちょ、すいません！調子に乗ってました！

感想は待ってますが、文句やはやめてくださいね。これでもかなり傷つきやすいので。

東方不敗、密談に紛れ込む

サヴォイア公家の姫君が使っていた館を改装したとかいうホテルの広々とした一室で、会合は行われていた。

まだ昼間なのにカーテンを締め、外からの視線を完全に遮断している。

このために運び込ませた大きなテーブルを囲む人数は、彼女を入れて四人。

まずは彼女　　エリカ・ブランデッリ。

十六歳のエリカが、この場で最も若い。

老人は二人。《老貴婦人》と《雌狼》　　この国の爛熟し切った魔術の世界でも、特に古く強力な騎士団の総帥たちだ。

古風な呼び方をするとすれば、グランドマスターである。

そして、最後は青年。

騎士団　百合の都　を代表する、まだ三〇前の若き総帥。

この男は、《赤銅黒十字》を代表するエリカと同じ『大騎士』の位階を持つ、刀槍と魔術を修めた『騎士』たち、中世を闊歩したテンブル騎士団　魔術師にして武人であった者たちの後裔なのだ。

その中でも大騎士の称号は、類いまれな勇士にしか許されない。

「さて諸君、そろそろ結論を出すべきではないかな。われわれ全員にとつて頭痛の種である、今回のゴルゴネイオン　果たして、誰へ預けるべきか？」

《老貴婦人》の総帥が提言する

「預ける？　どうか、それは。私にはあまり賢い策とも思えないのだが。我らの盟主たるサルバトーレ卿が不在だからといって、異邦の王を頼つたとあつてはあまりに情けない。いい笑いものではないかね？」

「笑いたい連中には笑わせておけばいいさ。重要なのは今回のゴルゴネイオンが本物で、今の我々には仰ぐべき王がない、という状況だ。一時の恥など些細な問題だよ」

「恥辱だけならばいい。しかし、王の怒りはどうだ？　我らがべつの王を頼つたとサルバトーレ卿が知れば、どれほどお怒りになると思う？　私はそちらの方が恐ろしいね」

彼はただの老人ではない。剣技に優れ、この世ならぬ秘術まで身につけた老魔術師である。

そんな彼でさえ、『王』への畏怖を隠すことなく露わにしている。

最強の騎士、最高の魔術師であろうとも『王』と『神』にはかなわない。これは世の常識であり真理なのだ。

「しかし、サルバトーレ卿がそのように些細なことを気にされるでしょうか？　あの方は我々のことなど、蜂の巣に集まる蜜蜂程度にし

か思われていない。蜜蜂が新たな女王を選んだところで、お怒りになりはしないでしょう」

老魔術師同士の口論に割り込んだのは、《百合の都》の長だった。一九〇近い高身長で、顔の下半分は無精髯に覆れている。整ってはいるが、ひどく陰気そうな顔つきだ。

品のいいスーツ合わせるネクタイは、やや悪趣味な紫色である。

紫は^{ヴィオラ}《百合の都》の象徴する色。

その一員、ましてや長がその色を身に帯びるのは、義務とさえ言える

エリカの身につける深紅のフォーマルドレスと黒薔薇を模した頭飾りも、《赤銅黒十字》の象徴たる紅と黒を表すものだ。^{ロッシネロ}

「とはいえ、どの王を頼るべきかは私にも見当がつきませんが。ゴルゴイオンは古き地母の徴^{しるし}。最古の女神との対決といえば、ヴォバン侯爵などは興味を示すでしょうがね。『まつろわぬ神』から免れるためにバルカンの魔王を招きいれては元も子もない」

かの魔王が本気で戦えば、都市の一つや二つ、簡単に消滅してしまう。

何しろ彼らが所有する『権能^{けんのう}』は、大地に立つ全てを打ちのめし、引き裂き、粉碎する。そんな類のものばかりなのだから。

「頼るべき王はいます」

潮時か。そう判断したエリカは、ようやく口を開いた

「そういえば、アメリカのジョン・ブルトロー・スミス氏は我ら民草の保護に熱心な、珍しい王だという。彼を大西洋の向こうから招聘でもしますか？」

世間話のような軽さで、百合の都の長が訊いてきた。

エリカの方も、カフェで雑談でも楽しむように気安く応じる。

「いいえ。あのロサンゼルスの守護聖人さまは、西海岸を蠅の王から保護することで手一杯だと聞いています。呼び出しに応じる余裕はないでしょうね、きっと」

若い二人は、老人たちより余裕を持っていた。

事態を甘く見ているわけではないが、己の才覚への自信が不遜な態度を取らせるのだ

「ならば、江南の羅濠教主（ロウホウキョウシウ）？それともコーンウォールの黒王子（ブラックプリンス）ですか？彼らは自分たちを崇める結社の総帥です。われわれが傘下に入らぬ限り、手を差し伸べてはくれないでしょう？」

「そのどちらでもありませんわ。ああ、アレキサンドリアのアイーシャ夫人でもないの、先に言っておきましょう」

「では、まさか東方不敗様ですか？しかし彼も侯爵とは別の意味で危険ですが。しかも危険度は格段に上」

「まさか。最古参にして最強のあの方が今どこにおられるのかを掴める者など、ここはおるか世界中のどこにもいないでしょう」

「では、もう誰もいない。『王』 カンピオーネの位階を持つ者は、地上に七人のみ。もう全員の名前が出てしまった」

東欧の老侯爵と中国南方の武^ぶ王^{わう}、そして妖^{まじ}しき洞窟^{どうくつ}の女王に極東の霸王。

彼らはもう二世紀、霸王に至っては三世紀以上に渡って齡を重ねる、古参の魔王たちである。そこへ続くのは新大陸の闇を駆ける異形の英雄と、大英帝国の叡智を強奪した漆黒の貴公子だ。

そして今世紀になって、欧州最強の剣士が王の位を得た。

ここまでは魔術に関わる全ての者が知ることだろう

だが、もう一人。奇しくも最強の王と同じ、東洋の島国が生んだ王の存在を知る者はまだ少ない。数少ない例外 自分のように、その戦いに間近で立ち会った者を除けば。

エリカはひそやかな優越感と共に、その名を口にした。

「いいえ。あと一人、草薙護堂の名前がまだです。わたしは彼を最も新しき王、八人目のカンピオーネである彼を選びます。サルバトーレ卿のいない今、我々が庇護を求めべきは彼ら以外にありえませんが」

「草薙護堂！」

《雌狼》の総帥が、呻くように短く言った。

「近頃、聞くようになった名前だな。このイタリアの地でカンピオーネになった日本人だというのが……所詮はうわさだ。確証はない」

「グリニッジの賢人議会が作成したレポートは私も読んだ。軍神ウルスラグナを倒し、化身の権能を篡奪したという話だろう？……どうにも信じがたいがな」

否定的な老いた魔術師たちへ、エリカは尊大に微笑みかけた。

「では、この情報はご存知でしょうか？いまサルバトーレ卿が行方知れずなのは傷の療養のためで、その傷を負わせたのは草薙護堂だということ。ええ、今から半月前の夜、二人の王が決闘し、死力を尽くした末に引き分けたのです。共に深手を負いましたが、幸い草薙護堂はすでに快癒しております」

「……草薙護堂がサルバトーレ卿と引き分けた、だと？」

「ありえん！卿の所有する権能は四つ。草薙護堂がうわさ通り本物だったとしても、ひとつしか権能を持たないはず。圧倒的に不利だ。勝負になるまい！」

エリカは軽い侮蔑のまなざしを老人たちに向けた。

「世迷い言をおっしゃいますのね。彼らは人の身でありながら神を殺し、王へと昇格した方々です。数字の上での戦力差など、どこまで意味があるでしょう？」

この言葉を受けて、不機嫌そうに老人勢は黙りこむ。すると代わりに《百合の都》の総帥、かの組織の大騎士が代々受け継ぐ『紫の騎

士』の名を持つ青年が口を開いた。

「一つ、うかがわせていただきたい。エリカ・ブランデッリ、あなたは我々や賢人議会も知らないカンピオーネ同士の決闘をご存じかどうか？」

「簡単です、わたしはあの決闘の立会人ですもの。わたしは草薙護堂の戦いをいくつも見届けてきました。その上で申し上げます。あなたの方はいずれ、サルバトーレ卿やヴォンバン候に匹敵する魔王となるでしょう。その未来に備えて、我らはあなたの方との縁を深めておくべきだと思っております」

「ほう ディアヴォロ・ロッシ 『紅き悪魔』たるエリカ嬢がそこまで肩入れするとは、未恐ろしい人物だ。しかも、お話から察するに、あなた個人はもう彼と浅からぬ結びつきがあるようですね」

「ええ。エリカ・ブランデッリは草薙護堂の愛人であり、第一の騎士である。そう考えていただいて構いませんわ」

当人が聞いていたら確実に否定していただろう宣言を、エリカは不遜にしてみた。

これが向き合う者たちに感嘆のため息を吐かせた。

「《赤銅黒十字》は草薙護堂の傘下となったか！」

と嘆じたのは、雌狼の総帥だった。

『王』すなわち、カンピオーネを擁する国は少ない。

全人類の中でも、たった八人しかないのだから当たり前である。

しかし、このイタリアにはサルバトーレ・ドニという『王』がいる。数年前までは一介の騎士に過ぎなかった青年だが、ケルトの神王又アダを倒して資格を得た。

カンピオーネは欧州を中心に、強い権威を持つ。

魔術に関わる者と、彼らの影響下にある政財界の重鎮たちが、『王』たるカンピオーネに忠誠を誓い、臣従するからだ。

彼らは覇者にして魔王　強大すぎる魔力ゆえに『王』と畏怖される暴君である。

その力を恐れ、崇め、忠誠を誓おうとする個人や結社は決して少ない。

「傘下に入ったわけではありませんわ。あくまで、わたくし独りが彼の愛人としてお仕えしているだけですから。……もちろん、将来的にはありうる話だとは思いますが」

やんわりと微笑むエリカに、　老貴婦人　の総帥は鼻で笑い返した。

「なるほど、君がここに派遣された理由がやっとわかったよ。その歳で大騎士の位階を継承した神童とはいえ、我々との会合に居合わせるのには明らかに場違いだ。　察するに、エリカ嬢は若きカンピオーネをくわえ込むための餌というところかね」

「今のご発言は、聞かなかったことにいたしましょう。紳士である長老の評判に傷が付いてはいけませんものね。愛し合う二人の仲に

余計な詮索を入れるのは、無粋というものです」

「ははっ、よく言うものだ！なかなか頼もしい雌狐ぶりじゃないか」
皮肉を利かせて老人が笑う。

エリカは微笑んだまま、ただ肩をすくめるだけだった。こういうときは雄弁よりも沈黙の方が効果的になる。

「まあ、いい。つまりは君がいる限り、赤銅黒十字は草薙護堂の庇護を見込めるのだな。そして君ほどの人材をあてがっている事実こそが、彼が本物であるという保証でもある。だから彼の力を借りると言いたのだろう、エリカ嬢は？」

「はい。もともとサルバトーレ卿は盟主とは名ばかり、己の戦い以外には興味をお持ちにならない方。有事に備えて、他の王に懇意をしておくことは決してマイナスにはならないはずです」

「しかし、あなたの言う草薙護堂の力を、我々は残念ながら確認していないのです。果たして彼らが真のカンピオーネなのか否か、見極めなくてははいけません」

朗々と訴えるエリカへ、『紫の騎士』は冷淡に言う。

「無論、『紅き悪魔』の証言は黄金よりも価値があるとは思いますが、それだけに我が一門の命運を託すわけにもいかないのです。遺憾ながらね」

「ええ、当然そうおっしゃると思っておりましたわ。ですから証明して差し上げましょう」

思惑通りの要求を、『紫の騎士』がようやく提示してくれた。

計画が予定通りに進むと確信し、エリカは鮮やかな微笑を唇にひらめかせる。見る者全てを感嘆せしめる、あでやかな紅椿にも似た笑顔だった。

「証明とは？」

「草薙護堂はすでにローマへ到着しています。今宵、あの方の戦いぶりを間近でご覧下さい。千の言葉を費やすよりも、その方が雄弁というものです」

「戦うとなれば、相手は？王の相手が務まる者など、簡単には見つかりますまい」

「もう、ここにいるではありませんか」

エリカの浮かべる笑みは快心の微笑。それは、一日前に護堂が電話越しに想像したものと寸分たがわぬ華麗さだった。

しかし、直後にこの笑みは凍りつく。招かれざる、されど受け入れざるをえない来客によって。

「そんなら、俺が直々に試ひてやろうじゃねえか」

突然部屋の隅から聞こえた言葉に、バツとこの場にいる全員が顔を向ける。

この面々に今まで気付かれなかった!? 一体どこの誰だ!?

そんなごく当たり前の疑問は、声の主が分かったと勝手に雲散霧消した。

「な!と、東方不敗様!？」

驚愕する老魔術師のその言葉に、未だ彼を見たことがなかったエリカさえ、眼前で壁にもたれかかる男の正体を悟った。

名実ともに世界最強。あの暴君の中の暴君であるヴォバン侯ですら頭が上がらないという、まさにカンピオーネの王。

その彼が、この場に現れたのだ。席にしていた四人は、一斉にその場に跪いた。

見た目は漆黒の髪を持つ容姿端麗な青年。

縦縞の入った深緑の着流しの上に羽織るのは、藍に桜の枝の染め抜きが入った着物。履物は下駄といった、見るからに江戸の町の遊び人といった様相である。もっとも、この場の人間にそれはわからないが。

懐からキセルを取り出し、くゆりと紫煙を立ち上らせる彼に、エリカたちは困惑していた。

常時行方知れずの彼がここにいるはずがない、と。

しかしその言葉は彼には通じない。

神出鬼没、それを体現した存在なのだ。この極東の霸王は。

「東方不敗様、い、いつからそちらに」

「はなっからいたぜ。おい、百合の。俺が危険たあ、言ってくれたねえ」

「も、申し訳ございません！分を弁えぬ失言によるご無礼、せめてこの身一つでご容赦を！」

彼がここまで必死になるのも無理はない。この霸王の逆鱗に一度触れれば、本人のみならず、友人や見ず知らずの隣人までその災を身に受けるのだから。

しかしその程度のこと、元より彼は気にも留めていなかった。単なる戯れである。

「別に、んなこたあどうだっていいんだよ俺あ。それよりも何でえ、テメエらんな暗がり面白そうなことひてんじゃねえか。こっちにも一枚噛ませてくれよ」

「し、しかし、東方不敗様の御手を煩わせるなど」

「さすがに三百年も生きてつと暇でなあ。同郷の新入りがどこまで俺を楽しませてくれるか、楽しみなんぞえ。それともあれかい？俺あ役者にひちやあ三枚目かねえ。そこんどこどう思つよ、百合の」

「いや とんでもない。東方不敗様御自らのお申し出であれば、是非に」

額に大粒の汗を浮かべながら、『紫の騎士』はただただ承諾するのみだった。

「いかがでしょう、長老方。他でもない東方不敗様が直々にその力量を測って下さるのであれば、これ以上の保証はない。もし草薙護堂氏の力が本物なら、わたしはエリカ嬢の提案に賛成いたします」

老人たちにならずきかけ、『紫の騎士』は言った。

「で、では、初めから東方不敗様に預かっていただけば……」

「恐る恐るこう提言したのは、さきほどから縮み上がり続ける《雌狼》の総帥だった。それに桜樹は、頭をボリボリ掻きながら答えた。

「ああ？俺が、んなかったりいことひなきやなんねえのか？」

「も、申し訳ございません！」

彼を不機嫌にさせたのではと、この場にいる魔術師の体感温度が三度ほど下がった。

「ま、いいや。で、不満そうなその嬢ちゃんは、そこんどこどう思ってたんでえ？」

いきなり矛先を向けられ、さすがのエリカも冷や汗が止まらない。

「申し遅れました、王。エ、エリカ、エリカ・ブランデッリ、と云います。不満など滅相もないですわ。わたしもそれがよろしいかと」

「ああ、ブランドツリのか。ま、ホントならお前めさんがその新入ひんいりと戦やる予定だったんだろうけどなあ。今回は譲こんけえってもらおうぜ」

「謎めいた若きカンピオーネと最古にして最強の霸王の対決 興
味深いを通り越して必見のカードです。エリカ嬢、予定は少々崩れたようですが、ここはあなたの目論見に乗らせていただきましょう」

「え、ええ、それはよかったですわ……」

引き攣くわった笑みを浮かべるエリカ。護堂に一体どう伝えようかと考えながら、彼女は笑い続けるしかなかった。

それからしばらくたち、護堂からエリカに電話がかかってきた。

街中で遭遇した女神の件について言おうとした護堂の耳に聞こえてきた、彼女らしからぬ殊勝な物言いでの突然の謝罪と、死なないでねの言葉に彼が混乱したのは言うまでもない。

東方不敗、密談に紛れ込む（後書き）

書き終えました。いやあ、江戸っ子口調は難しい。いや、難ひいでさあ。

つてえわけで、俺あ生粋の江戸っ子だ、べらんめえ！つて方。違和感なんかあつたら感想に送つといてください。ついでに指南ひなんなんかひてくれつと助かりやす。

要望があれば、桜樹の生い立ちなんかも書きますが、なけりゃあ書きませんで。十人ばかひくりゃあ、筆が乗るつてもんですぜい。

次回「東方不敗、本場の味を喰らう」

東方不敗、本場の味を喰らう

宮殿だった頃は壮麗な城壁だったと思われる、中途半端に巨大で細長い壁。

一部はどうか立ってはいえるものの、ほとんどが横倒しになっている石の円柱群。

それらに囲まれて、緑の空き地がある。そこに、三人の先客が待っていた。

まず老人が二人。

道中聞いていた《老貴婦人》と《雌狼》の総帥だろう。

そして青年が一人。《百合の都》を束ねる『紫の騎士』にまちがいあるまい。

ちなみに彼らの所属する騎士団とは、要するに秘密結社である。

地中海沿岸の諸国には、中世のテンプル騎士団をルーツとする結社が多数存在しているらしいのだ。

「はじめまして、草薙護堂。お会いできて光栄ですよ」

型通りの挨拶を『紫の騎士』は護堂にする。護堂は頭を下げそれに戻した。

「草薙護堂です。いろいろとバカげた体質になってはいますが、み

なさんに恐れ入ってもらえるほどの人間じゃありません。どうか普通に相手してください」

「…………ご謙遜をおっしゃる。今のお言葉だけでも、あなたが只者ではないという証明になりますな。そのイタリア語、普通に習い覚えたものではありませんまい？」

「左様。それは『千の言語』　長年魔術を学び、言霊の奥義を悟った達人のみが会得する秘術です。あなたほどのお歳で使いこなす者は、なかなかおりませんな」

老人二人が口々に言う。

護堂は、自分の便利な能力の正体に苦笑を禁じえなかった。

そこで、護堂があることに気付いた。

「で、俺は一体誰と戦うんですか？エリカにいくら聞いても謝られるばかりだったんですが」

その言葉に、一同が沈黙する。その様子に護堂は、自分が何か地雷を踏んだのかと焦った。

「そのことですが」

と、エリカが問いかける。

「東方不敗様は一体どちらへ？」

あまりに物騒な固有名詞に、護堂の発汗量はみるみる増える。

彼の頭には今まさに、生身で巨大ロボットを破壊するアジアの主の姿が思い描かれていた。もっともこちらの東方不敗はそれ以上に物騒なのだが。

「さあ。あの後ピザでも食ってくるとかおっしゃられ、どこかに消えてしまいましたから」

苦笑いする『紫の騎士』。その言葉に、エリカも呆れたように嘆息する。

すると、小気味のいいカラン、コロンという音。

「おう、待たせたねえ。いやあ、はふ。やっぱり本場は違うねえ。はふ。チーズが伸びる伸びる。はふ」

今まさに、チーズを口元から伸ばしてハフハフしている、謎の和服青年が現れた。

「……………なあエリカ」

「……………どうしたの？」

「あれが俺の相手か？どう見ても江戸時代の遊び人にしかみえないんだが」

「お！俺の職業見破るたあ、やるねえ同郷の士い」

「え？当たったの？え？」

戸惑う護堂に、エリカは真剣な面持ちで向き直る。

「護堂、一つだけ言っておくわ。今だけでなくこれから先、見た目に囚われたらおしまいよ」

それは、かなりの確立で美男美女の多い『まつろわぬ神』にも言えることなので、護堂は気を引き締める。その様子を見て、ピザ男東方不敗こと東風丘桜樹はカラカラ笑った。

「ははは、わけえの。んな気張ることたねえよ」

「いや、あんた、俺と同じくらいだろ」

「護堂、その方はすでに齡に三〇〇を超えているわよ」

「………へ？」

「よせやいエリカ嬢。俺あいつまでも純真な少年じゅんしんなしょうねんの心を忘れない永遠の若者だぜい。それをじじい扱いたあ、俺のガラスのハートが傷ついちまうや」

「強化ガラスの、でしょうけどね」

「はっ、違えちがねえ！」

「え、と………え？」

「だから見た目で判断しちゃ駄目なんだってば」

呆れた様子のエリカを尻目に、桜樹が護堂に近づいた。

「ふうん。お前えさんがかの軍神、ウルグラスナをねえ。」

「え、と。あなたは一体誰なんですか？」

「ん？おい、エリカ嬢。お前えさん、こいつに俺のこと教えてねえのかい？」

「こいつ、何にも教えてくれなかったんですよ」

「そんなら百合の。適当に教えといてくれ。そんな間に俺あ残りのピザを食っちまうから」

そう言つて桜樹は一瞬で消え去る。突然の出来事に護堂は驚くが、他の面々にすれば、これぐらいは自分でも出来る、といったものだった。

「確かに承りました。では草薙護堂。彼、東風丘桜樹様について我々が知る限りのことを教えましょう」

「知る限りつて……そんな時間かけていいんですか？」

「それについてはご安心を、としか言えませぬ。せいぜい五分です」

「それまた随分と短いんですね」

ごく当然の護堂の意見に、やはり苦笑いしか出来ない『紫の騎士』。桜樹に関わるともれなく苦笑いがデフォルトになるのだろうか？

「彼を一言で表すならこの言葉しかありませんからね」

そこで一度言葉を区切る。そして、告げた。

「『最強』、です」

あまりに抽象的な単語に、思わず耳を疑う。しかし、続く言葉に絶句した。

「彼はこの世界に存在する七人　未だ実力を知らぬあなたを除きますが、その全てのカンピオーネが一度にかかっても最後には必ず一人で立っている、それほどの力を持つ最古参にして最強のカンピオーネなのです。数多の神を殺し、赴いた戦いに負けはなし。故についた二つ名は『東方不敗』。それが彼です」

しばらくの硬直の後、護堂はエリ力を見た。その顔は今にも泣きそうな顔だった。

「お前、何か俺に恨みがあるのか！？ そうなんだよな！」

「お、落ち着きなさい護堂！ わたしだって予想外だったのよ！ 本当ならわたしが出るつもりだったのに、急に現れたんだから！」

「断るとかなかったのかよ！」

その言葉に、彼を除く四人はまたも沈黙した。その重い空気を壊したのはエリ力だった。

「あの方はね、基本日和見主義なの」

突然どうした？と思いつつも、そうなんだ、と適当に答える。

「最強の力を持ちながらもそれに驕ることなく、自由気ままな旅を続ける。そんな方なの」

「それっていい人じゃん」

「……………そう、機嫌さえ損なわなければ、の話だけどね」

「へ？」

「あの方は滅多なことでは怒らないのだけれど、一度怒りに触れれば……………」

「ふ、触れれば……………」

ゴクツと唾を飲む。

エリカが、真っ直ぐに護堂の眼を見た。

「一族郎党皆殺し、よ」

「……………よし、帰ろう！」

「聞いていたのですか！？貴方が逃げたとあつてはどうなるか！」

「そうそう、帰らせねえぜ。今日の楽ひみに逃げられちゃあ、俺あこのほとばひるパトスをどおすりゃいいよ。是非せい教おひえてくれや」

「し、知りません！森の獣でも狩って発散してください！」

「つれねえな。ま、知^ひったこつたあねえけどよ」

「離して下さい！離せえー！ー！」

襟首をしつかりと掴み、キセルを啜える桜樹に護堂は必死の抗議をしたが、それが聞き届けられることは終ぞなかった。

その様子を見ていた四人の魔術師は、心の中で静かに合掌したのだ。
った。

東方不敗、本場の味を喰らう（後書き）

今回は桜樹^{しげ}ん権能^{けん}の一つ^{ひとつ}あ出^でま^まさあ。

でも、それが最弱^{さいじやく}たあやりすぎ^{やりすぎ}感が否^{いな}め^めねえ……。。

ま、タグにチート^{ちーと}つてあるひ、いいわなあ。んぐらい。

次回「東方不敗、後輩^{こうはい}をサンドバック^{さんどバック}にす」

東方不敗、後輩をサンドバックにす（前書き）

遅れやひた！すんません！

そひて微妙な上にあんまサンドバックじゃねえ！

とにかくどごごぞ！

東方不敗、後輩をサンドバックにす

「さて、役者も揃ったんだ、そろそろ始めつとすつかねえ。百合の、立会人は頼まあ」

「かしこまりました、東方不敗様。他のお三方はお下がりがいい。最強のカンピオーネの戦いです。距離を置いた方がいい」

『紫の騎士』の勧めに老人たちとエリカは頷く。

その直後、二人の姿はかき消えてしまった。ほんの一瞬で、跡形もなく。

「あの人たちまで本当に消えた。たいしたもんだ」

「今更何に驚いてんでい。姿あくらまひたくれえで。大体、離れたとっから見物ひてらあよ。ま、んなこたあ、どうだっていいんでい。さっさと始めようや。百合の、合図」

素朴に驚く護堂から、桜樹は五メートルほど離れた。

そこから『紫の騎士』に呼びかける。

「では、草薙護堂殿の冥福を祈ります。始めて下さい！」

「縁起でもないな！」

開始早々ツッコむ護堂。しかしこの件に関しては心の中で満場一致で『紫の騎士』が支持された。

「んじゃま、おっぱじめよおじゃねえか。後輩ごうへえ」

「……………お手柔らかに頼みますよ」

非常に嫌そうな顔の護堂と、対照的に玩具を見つけ喜ぶ子供のよう
な顔の桜樹。

異様なほどのテンションの落差だ。

「やる気がねえならこっちからいくぜい！ちったあ抵抗ひろよ！」

瞬間、地面が爆発した。

魔力も何も用いない、純粹な脚力で地面にクレーターを作った桜樹
は、そのまま護堂に殴りかかる。

それを間一髪でかわすも、額には脂汗をびっしりかいていた。

護堂がかわした地面に、桜樹の腕が肘までめり込んでいたのだ。こ
れに当たれば人体など一溜まりもないだろう。

しかし桜樹は休む暇を与えない。

常に護堂がかわせるか否かの瀬戸際のスピードで攻撃する桜樹に、
護堂は逃げ回ることしか出来ない。

せめて体制さえ立て直せれば。

そう考えながら必死に攻撃を避け続け、数分後、ようやく正面から

相対することが出来た。

「いい目だ。ようやくやる気になったかあ！」

そう言って笑う桜樹は、心の底から楽しそうだった。

逃げ回る護堂と、攻め続ける桜樹。

その様子を城壁の上で見ていたエリカの隣に、『紫の騎士』が魔術で上がってきた。

「護堂氏はこの決闘に、あまり乗り気ではないようですね」

『紫の騎士』は、見下ろしながらそう評する。

「これでは草薙護堂の力の証明にならない。ただ逃げ回っているばかりですからね。もっとも、相手が相手だというのが大きいでしょうが……。ああ、そんな論評はこの勝負でなくとも想定済みだとおっしゃりたいようなお顔だ」

コメントする長身の青年へ、エリカ若干余裕とは言えないものの何とか笑みを見せた。

「おそらく、こうなるものだと思っていました。あまり戦いを好まない方なのです。……。もっとも、最初の内だけですけどね」

「と、おっしゃいますと？」

「あの方々はカンピオーネ。神を相手にしてまで戦い、勝利し、至上の権能を篡奪された御方たちです。口先で何と言おうとも、本心から戦いを嫌うはずありません。現に万事の傍観者を謳われる東方不敗様でさえ、いざ戦いとなればあのように純真無垢で残酷な童のようになられる。全てのカンピオーネがそうであるように、草薙護堂もまた闘争の申し子。勝者の中の勝者なのです」

「ほう……それにしてはかなりの逃げ……いや、東方不敗様を前に逃げないものなどいませんね」

この短時間で悟ったのか、『紫の騎士』は遠い目をしている。

右に左にと逃げ惑う少年を愛おしげに眺めながら、エリカは言った。

「もうすぐ終わりますわ。あ、彼が東方不敗様に潰されるという意味でなく。たしかにそろそろ逃げ切れなくなる頃合ですが……
。草薙護堂に関する賢人議会のレポートをお読みになったことはありますか？」

「一応。もつとも、あれがどこまで正しいのか、かなり怪しく思っておりますが」

「六割程度なら、信用しても問題ありませんわね。よく調べたものだと思います」

「では、あれも事実なのですか？草薙護堂の所有する権能は、対峙する敵、置かれた状況によって変化を起こす　あらゆる障害を打ち破る力だというのは？」

「ええ！ほら、ごらんなさい、『紫の騎士』殿！」

二人の眼下の状況に変化が訪れた。

正面で対峙した護堂に桜樹が殴りかかる。

しかし、それを護堂は片手で受け止めたのだ。

「あれは　　！東方不敗様を止めた！？」

「英雄ヘラクレスは天を支えるほどの剛力だったといえます。草薙護堂が倒したウルスラグナは、そのヘラクレスと強い絆を持つ神格です。あちらに後れを取ったりはしませんわ」

誇らしげに語るエリカ。

今や、そのままの勢いで桜樹の拳を掴んだ護堂は、力任せに彼を放り投げた。飛距離がどう考えても成人男子が飛ばされる距離ではない。

人間離れした、とてつもない怪力である。

「……………われわれは草薙護堂が所有する権能を『東方の軍神』と命名する。軍神ウルスラグナは一〇の姿に変身し、あらゆる戦場で勝利を得た。草薙護堂もまた、必要に応じて自らの能力を変化させる怪物なのだ。賢人会議のレポートは、たしかこうであったな」

不意に老人の声が割って入った。

いつのまにか《雌狼》の長が、エリカと『紫の騎士』の傍らにやっ

てきていた

「あら、長老　お一人ですね？」

「まあな。トリノの老いぼれは、この期に及んでもネズミのように隠れておるよ。わしはもういい。最強であり最古参でありながらもつとも謎に包まれた霸王と、新たなカンピオーネの権能を間近で見る機会だ。この目で直接、王の御力を拝見させていただく」

《雌狼》の総帥はローマ訛りの早口で吐き捨て、嘲笑で唇を歪めた。

ローマの騎士と魔術師を統べる結社の総帥は、トリノを本拠地とする《老貴婦人》が嫌いなのだ。

「サルバトーレ卿が現れたときもお若いと思ったが、今度の王はさらに若いな！あの剛力以外にも、彼の能力は変化するのだろうか？」

「草薙護堂が怪力を使えるのは、自分を凌駕する力の持ち主に対してのみ　賢人会議はそう推測していましたが……」

「尋常ならざる膂力を持つ敵と戦うとき、草薙護堂は『雄牛』のウルスラグナに献身して、無双の剛力を得ます。ウルスラグナ神の化身は全部で一〇。その全てを行使できるかはまだ不明ですが、いくつかの化身はもう掌握しております」

風、雄牛、白馬、駱駝、猪、少年、鳳、山羊、戦士。

ウルスラグナの中でも『雄牛』と『駱駝』は大地と深く関わり、強力・強壮・強精のシンボルとなる姿であった。

その能力も自然と、怪力、荒ぶる猛威にまつわるものとなる。

「やあー。驚おどえたや。そいつがウルスラグナの権能のひとつねえ」

しかし、腐っても彼は最古の王。

たかだか怪力だけでは敵う道理などない。

「さあ、再開と洒落こぼこもうじゃあねえか！」

ここに、第二幕が始まった。

「俺は相手が権能を出ひたら、手前てまえも出すって決めてんだ。さあさあとくとご覧あれ！世にも貴重な俺の権能披露会けんのつしぎけいの開催けいせだ！」

「おいおい、マジで今まで素の腕力だったのかよ………これだからカンピオーネってやつは！」

呆れた顔をしながら、未だ雄牛の効力が残る右腕を振り被りながら、護堂は桜樹に走り寄る。

「これで！」

「其は西方の守護者にして、主の御前に待る下僕なり。其は神の力にして、退廃の都を滅する裁火なり。其は預言者の光にして、天の御言葉を告げる標なり。敬虔なる隣人よ。驕るる事なかれ。墮ちることなかれ。刃向かう事なかれ。さすれば汝らは永劫に救済されん」

一撃で決めようと振りぬかれた拳をヒラリとかわし、桜樹は詩を詠

いだす。

その口から言葉が発せられることに、大きな力が桜樹に集まっていた。

「やつべえな！ だったら俺も最高の攻撃で決めるしかない！」

覚悟を決めた護堂も、自分が今現在行使できる最強の攻撃を放つべく、詠唱を開始する。

「さて汝は契約を破り、世に悪をもたらした。主は仰せられる咎人には裁きをくだせ。背を砕き、骨、髪、脳髓を抉り出し、血と泥と共に踏み潰せと。我は鋭く近寄り難き者なれば、主の仰せにより汝に破滅を与えよう」

彼らが紡ぐのは、神の詔みことのりであつたはずの聖なる詩句。

その聖句が忽然と、言霊となつて護堂の口からあふれ出てくる

「さらばこそ、罪人よ！ 咎人よ！ 悪人よ！」

「猪は汝を粉碎する！ 猪は汝を蹂躪する！」

これは、神々から奪つた権能を誇示する、神殺しの勝ち鬨である。

これは、仇敵たる神々へ向けた、人より生まれし魔王の挑発である。

これは、己が屠つた神の力を掌握するための、苛烈な意思の表明である。

天に住まう神々よ、我が言霊を聞き、凌辱された同胞の死に怒れ。

地を住く神々よ、我が言霊を聞き、いずれまみえる神殺しの暴虐を呪え。

海に潜む神々よ、我が言霊を聞き、もはや逃げ場のない己の悲運に
哭き、嘆け。

我は神々の怨敵である！我は神力の篡奪者である！無意識にすり込まれた魔王の本能が、彼らにこの言霊を吐かせるのだ

「それに何だ、この地震は!?!」

「猪と言っていた以上、これもあの方の権能なのでしょうね……
……。ウルスラグナ第五の化身は鋭い爪の猪、全ての物を一撃で粉砕する姿だと聞いていますが」

城壁の上で《雌狼》の長と『紫の騎士』が動揺している。

今の言霊は、破壊の権化たる神獣を呼ばわるための聖句だった。

神獣が降臨する気配を感じ取って、天はおののいて暗雲を呼び、地は恐れて微弱な地震を起こしている。

「中々愉快ゆけえだな。『猪』なんて危ねえもん、こんな爺ちゃんに使う
ちやーよ」

「どう考えても貴方は、ウチの祖父より若々しいですからね。敬老
精神なんて沸きませんよ」

護堂のいる丘の上空では空間が歪み、この世ならざる異界と現世をつなぐ裂け目が穿たれ、そこから漆黒の毛皮を持つ巨大な獣が現れ出ようとして、もがいていた

今はまだ鼻先から首の辺りまでと、鋭く大きな二本の牙しか出ていない

しかし、まもなく全身が地上に現れ出るはずだった

ウルスラグナが主ミスラの敵を滅ぼすべく化身したのが『猪』。

今では護堂が使役する魁偉な神獣である。

これを使うための条件は融通が利く

『巨大な物質を目標に定め、その破壊を決意』すれば呼び出すことが出来るのだ。

『猪』はただ巨大なだけではない。

咆哮は超音波となって建造物を壊し、地を駆ければM5程度の地震を起こす。目標を塵にするまで、その暴走は止まることを知らず辺りをガレキの山にするが。

だから、それを感覚で察知した桜樹は、急いで詠唱を終わらせた。さすがに権能なしで神獣を下せるほどの人外では………あるのだが。

しかし、それは奥の手の秘奥の中でも伝家の宝刀。そう易々と衆目に晒したくはない。

「反徒たる汝らは、終わりが訪れしその日まで悔い改めるがいい。最期の裁定が訪れしとき、終焉のラツパは鳴り響かん。信徒の原初の罪は洗われん」

桜樹の背から、全長十メートルにも及ぼうかという、神々しい一對の翼が現れる。

「意外とメルヘンですね」

「自覚くれえあらあ」

護堂の皮肉を軽く受け流す。

と、同時に『猪』が全容を現した。

しかし、護堂の狙いは『猪』を用いた攻撃ではない。彼が少しでもそちらに気を取られたその隙に、『猪』の副産物である突進力で彼を倒そうとしたのだ。

だからこそ、予想だにしていなかった。

「さあ、裁きだ」

神々しく輝く純白の大翼を構成する羽根。その一枚一枚が変貌していく。

「燃やひ尽くせー！」

腐った卵の匂いとともに、羽根が火球となり『猪』を襲う。

桜樹が殺したのは、旧約聖書やイスラム教の教えに登場する天使だ。受胎告知や預言者ムハンマドへの宣託など、神のメッセンジャーとして描かれることが多い百合をシンボルにする大天使。

イスラム圏では「ジブリール」の名で呼ばれる、神の力ことガブリエル。

週末の日には自らラッパを七つ吹き、世界の終わりを宣告するとされる。

その権能が示すのは、神を信じぬ愚か者への断罪の象徴。

【滅亡の裁火】ジ・エンド・オブ・ザ・ワールド。それがこれにつけられた名だ。

古くは墮天使ベリアルの手によって退廃に至った二つの都、ソドムとゴモラを一夜にして滅ぼした紅蓮の裁火。

伝承によれば、ガブリエルは硫黄と炎を降り注がせ都を滅ぼした。

それを再現するかの如く、翼を構成するすべての羽根が燃え盛る硫黄の塊となるのだ。さらには、魔力を注ぐ限り羽根は無尽蔵である。あまりの壮絶な光景に圧倒されつつも、作戦通り護堂が突っ込もうとするが、そのときには文字通り、『猪』の姿はなかった。

「おいおい、滅茶苦茶すぎるだろ……………」

苦笑を浮かべるより他ない、といった感じの護堂に少しずつ終末を
もたらす天使が近づく。

「^{ひめ}終え d
」

その瞬間だった。

東方不敗、後輩をサンドバックにす（後書き）

色々言いてえことあるかと思いやすが、批判の類は心が折れるんで、遠慮ひてくだせえ。

東方不敗、帰還する(前書き)

お久ひぶりでござえやす。ではどうぞ。

東方不敗、帰還する

『 〇 』

常人には反応すら出来ない、まだ着メロが鳴ってからコンマ何秒の世界。

その瞬間、彼は一瞬で権能による白翼を霧散させ、着流しの胸の内側に持っているケータイを取り出すと同時に開いた。

『 おー 』

着メロに設定されているのが年頃の少女らしい声、と魔王である護堂なら辛うじてわかるかわからないかといったタイミングで、彼は通話ボタンをプッシュし耳に当てた。

ちなみに、着メロの全容を知っているのは、桜樹とこの声の主しかないと言っただから、彼がどれほどこの音声が聞こえるのを楽しみにしているかが分かるだろう。

「へえへえこんばんは！そっちはもうお早うか？いついつまでも永久に、未来永劫世界が滅ぶその日まで、その後の輪廻転生の果てまでも、何があっても何を犠牲にひてでも変わんねえ愛を盲目的に捧げ続けるユアスイートビッグダディなパパだ！どうひた！俺の可愛い可愛い愛娘よ！相談ごとか！？もひや虐められたか！？任せとけ！今すぐそいつらの息ん根止めに参上ひてやんよ！待ってな！」

護堂を始め、今の今まで桜樹の無双っぷりに言葉を失っていた魔術師たちも、突然の異国語での会話に驚くが、その後の桜樹のテンシ

ヨンの上がりつぷりと会話の内容に若干どころじゃなく引いていた。

『やだなあ、お父さん。照れちゃうじゃない。私も愛してるよ。そうじゃなくてね、ちよっと頼みごとがあるの』

「おうおう！遠慮することあねえ！パヒリから世界征服まで何でも言えや！今日中に叶えてやんよ！」

上限と下限の開きが太陽から冥王星くらい離れているが、当事者の桜樹には一切冗談の様子が見られない。

電話の主の出方次第で世界が変わる、と護堂やエリカといった日本語を解する事が出来る面々は理解してしまった。

『うちの奴らが、理由も話さないで、カタギの家にカチコミに入ろうとしてるの。止めてちょうだい』

「万事了解、委細承知！俺の娘困らせるポケカスどもに焼きいれたんよ！あ、お土産期待してくんな！」

『はい。じゃあ待ってるわよお父さん。急がないとめんどくさい事になっちゃうから』

「ふっ、パパを甘く見んなよ。十秒もかかんねえさ」

『さすがお父さん。素敵ね』

そう言いながらも向こうが電話を切るまで、桜樹は通話終了ボタンを押さない。

彼にしてみれば、自分から娘との繋がりを絶つなど、たとえ電話だろうとできないのだ。しかし、向こうから切られても苦痛に胸が張り裂けそうになる。

親バカとは、総じて面倒くさい連中の巣窟である。

むこうでクスツ、と愛しい娘が笑いながら電話を切つたのを確かめ、通話中いつの間にか使用していた音声録音機能を停止し、データフォルダに保存する。

「んじゃま、俺は失礼^{ひつれえ}仕らせてもらやあな。ああ、百合のお！こいつあ合格ってことにひとけよ！俺がお墨付きをくれてやる。んじゃ、機会^{まみ}がありやあまた見えやひょう」

そう宣言した桜樹は、まるで元からそこにはいなかったように、忽然と姿を消した。

厄災のように現れ、人災を巻き起こし、天災のように去っていく。

史上最強とまでに称されるカンピオーネは、関わった全員に途方もない疲労感を与えるだけ与えて、立ち去ったのだった。

その少し前。日本のとある日本屋敷にて。

「だから、行くなつて言つてんでしょうが！」

叫ぶのは、十七、八に見える少女だ。しかし、ただの少女でないことは、その顔を見れば分かるだろう。

まるで人ではない、いや、人と同列に扱うのすらおこがましく思えてしまう、絶世の美少女。

まず、男女問わない視線を惹きつけるのは、その髪だ。

黒曜石のような艶やかな黒髪は腰まで伸ばされ、枝毛一つないそれは少女が動いたときに、さも生きているかのように脈動する。

次に目を奪われるのは、人形細工のような高貴さを漂わせる顔の造形。人を見た目だけで優劣をつける世界ならば、最高峰の国宝として扱われてもなんら不思議はないだろう。

止めとばかりに、女性としては長身でスレンダーな体軀は見目麗しくも儂げで、触れることすら憚られるほどだ。

しかし、とある一点が、彼女が作り出す空気の全てを破壊する。

それは……………。

「どいてくださいえお嬢！このままやられっぱなしじゃあ、オジキに向ける顔がありやせんー！」

「桜田組一同子々孫々までに残る汚点になります！どうか俺たちをお通しくださいませ！」

彼女の眼前に群れる、総勢五十数名のイカついおっさんたちである。

スキンヘッドや角刈り、グラスや啜え煙草など特徴を挙げればい

るいろあるが、最も目を引くのは一点。

彼らが持っている、刃物チャカ（ドス）と一拳銃だ。

もうお分かりいただけただろうか？

ここにいる野郎たちは、世間一般で『ヤのつく自由業』と称される御仁たちである。

そして、そんな彼らを身一つで止める少女は何者なのか？

彼女の名は桜田桜子。城楠学院高等部に通う現役女子高生であり・

「もうあつたま来た！」

ケータイを取り出し、一分ほど話をして、電源を切る。

その数秒後、先ほどまで騒いでいた男たちは、その動きを止めた。

彼らの目線の先。桜子の背後にいつの間にか立っていたのは、一見、時代錯誤な遊び人風の男。

あまりにも場違い。あまりにも時代遅れ。

しかしそんな彼こそが、桜子の父親にして、男どもの父親代わりでもある、この屋敷の主なのだ。

「お、おー！」

「おい手前^{テメエ}らあ、なあに俺の、可愛い可愛い桜子ちゃんに、迷惑^{めいわく}かけてんだコラ？」

「オジキイイイイイ！？」

東京都文京区。そこに二百年以上根付いてきた、地元民に敬愛される任侠一家がある。

組員は代々子孫によって継がれ、新規参入する奴も全て子供のころに引き取られた、孤児だけ。

故に組員は皆家族であり、その絆は山より高く海よりも深い。

その組の名は、桜田組。

そしてその組長こそ、極東で生を受けた最強の魔王である東風丘桜樹、その人だ。

編纂委員会などがうっとうしいので、苗字は桜田、とここでは名乗っている。すなわち、桜子は彼の実子だということなのだ。

その東風丘 もとい、桜田桜樹は、一斉に頭を垂れる男たちを一睨みし、一番近くにいた、組の若頭である勝男に問いただした。

「さて、きつちり話^{ナヒ}はひっかり聞かせてもらっぜ？お前らが桜子ちゃんを困らせてまでカチコミひようとひた相手^{いってえ}たあ、一体どこの誰でい？」

二人の脳天を、どこからともなく取り出したハリセンで、一発ずつ張り倒す桜子。

「何ひやがんでい桜子ちゃん」

「痛いですよんお嬢」

「どんな重要な用事かと思ったら、私へラブレターをくれた子の家に行くつもりだったの!？」

「子、やありまへん。恋文なんて、んな女々しい真似する輩は男女で十分です。お嬢が欲しけりやわてらの屍超えていかんかい!！」

うおおおおおおおおお!!

むさい男の咆哮が夜の街に響き渡る。しかしこれもいつものことなので、ご近所さんも慣れたものである。

「おいおい。俺を忘れちゃいかんぜ？桜子ちゃんの婿になりたきゃあ、俺を殺せるようなタマじゃねえとなあ？」

「ねえお父さん。私を結婚させる気ないでしょ」

とにかく!と、桜子は言い聞かせる。

「もうその子の告白は断ったから、その件は手打ちにしないさ」

「お嬢。世の中にはさらしたことに對する責任ちゅーもんがあるんです。そこんとこ、その娑婆ガキにいつぺん教えたらんとあかんと

ちやいますか？エンコ詰めさせてケジメ取らせるくらい……………

「だから筋モンの常識をカタギの世界に持ち込むなって、いっつも言ってるでしようが！！」

学院の二大美女の一人として知られる桜田桜子に、未だ男の影がないわけ。

それは世界最強の魔王と一騎当千の極道五十人が、常に影から目を光らせているにいなからなのだが、その真実を知るものは学院には誰一人としていない。

また戻ってイタリアである。

ゴルゴネイオン。

『三位一体』の叡智を刻んだ《蛇》は、仇敵の手に渡ったようだ。

コロッセオからやや離れた城跡を訪れ、彼女はそれを直感した。

この地に残るゴルゴネイオンと仇敵の余韻。この石造りの元から壊れていた城跡を、さらに完膚なきまでに破壊したのは、まちがいになく神殺しの権能である。

……………周囲では一〇〇を超える数の人々が、忙しなく作業している。

しかし、彼女を気にする者など、一人もない。

人ならざる身である彼女が、己の力をもってそうしているからだ。

惨状を見回しながら、彼女は先日会った神殺しのことを思い出した。

異邦から来た、若き魔王。

やはり、あの者の仕業だと見なすべきだろう。ヘルメスの弟子ども

人間風に言えば魔術師たちは、扱いあぐねたゴルゴネイオンをあの神殺しに託したのだ。

異邦人の手に渡ったなら、おそらく《蛇》も異国に持ち去られたはず。

いいだろう、と彼女は思う。

異邦より招来されたのは、こちらも同様。

《蛇》と彼女の間には、決して朽ちない絆がある。その絆が、彼女を《蛇》の元へと導いてくれる。

「我が求むるはゴルゴネイオン。かつて我が楯に刻み、古を偲ぶよすがとした蛇」

自然と謡が、口をついて出る。

あの《蛇》を手に入れるためなら、喜んで海を渡るのではないか。

遙かな東方へと目を向けて、足を踏み出す。

「我が求むるはゴルゴネイオン。まつろわぬ身となつた我に、古き権威を授ける蛇」

彼女の呼び名は多い。

ゴルゴンもメドウサも、かつて所有した名前の一つにすぎない。

しかし、その意味するところは全て同じだ。これらはかつて地中海に君臨した、三位一体の聖母を讃える尊称なのだ。

「我が求むるはゴルゴネイオン。古き蛇よ、願わくば、まつろわぬ女王の旅路を導き給え。闇と大地と天上の叡智を、再び我に授け給え！」

まつろわぬ女神は異邦を目指す。

東方へと至る旅路を、ゆつくりと歩み出す。

そこに、[「]最悪最凶（さいあくさいこう）の仇敵（あかひ）がいることなど、露知らず……………。

東方不敗、帰還する（後書き）

次回は一気に飛びますぜ。

『東方不敗、義姉と見える^{まみ}』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5527s/>

カンピオーネ！ 東方不敗を冠する王

2011年11月16日10時47分発行